

—ものづくり・商い・もてなしのまち京都—

(1) はじめに

京都の産業は、日本の政治・経済・文化の中心地として栄え、情報や物資が交流するなかで、町衆が自由に活動することにより生まれ、京都の四季の移ろい豊かで風光明媚な自然環境のなかで培ってきた美意識によって育まれてきた。

今日、そのうちの多くは伝統産業として受け継がれる。また、伝統産業による製品のうち17品目は、伝統的工芸品として国の指定を受けたものであり、その数は東京に次いで全国で二番目に多い。

また、伝統産業からスタートして、そのコア技術や培われた美意識を活用して先端産業に生まれ変わり、時代の先端を走る企業の出現にも枚挙にいとまがない。こうした先端産業は、直接、海外へビジネスを展開し、京都から本社を東京に移すことがない。これは大阪生まれの大企業の行動パターンとは大きく異なる。

このように、京都は、多くの伝統工芸品を作り出す力が集積することによって、新しい産業を生み出す力を持つ都市といえる。

さらに、京都には、古くから栄えてきた市場や縁日市があり、現在においても人々の暮らしに溶け込んでいる。京都の商店街のなかには、錦小路市場のように、近世以前の市場に由来するものがあり、それが形を変えながらも、現代に継承される事例として重要な地域といえる。また、寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった近世の京都では、境内やその周辺で縁日市が立ち、今でも弘法さんや天神さんが広く知られる。

そして、京都には、^{かみしちけん}上七軒、^{ぎおんこうぶ}祇園甲部、祇園東、^{ぼんちやう}宮川町、^{ふんとちやう}先斗町の五つの花街があり、ここでは、京都独自の洗練されたもてなしの文化が受け継がれ、息づいている。芸妓や舞妓の立ち居振る舞い、洗練された和装姿、それらは全てもてなしの文化が形となって現れたものである。

(2) ものづくりに見る歴史的風致

市内には、伝統工芸に関わる製造・販売を行う事業者が広く分布している。ここでは、京都の伝統産業である京焼・清水焼や西陣織、京友禅などの代表的な地域で形成された京都の歴史的風致を示す。

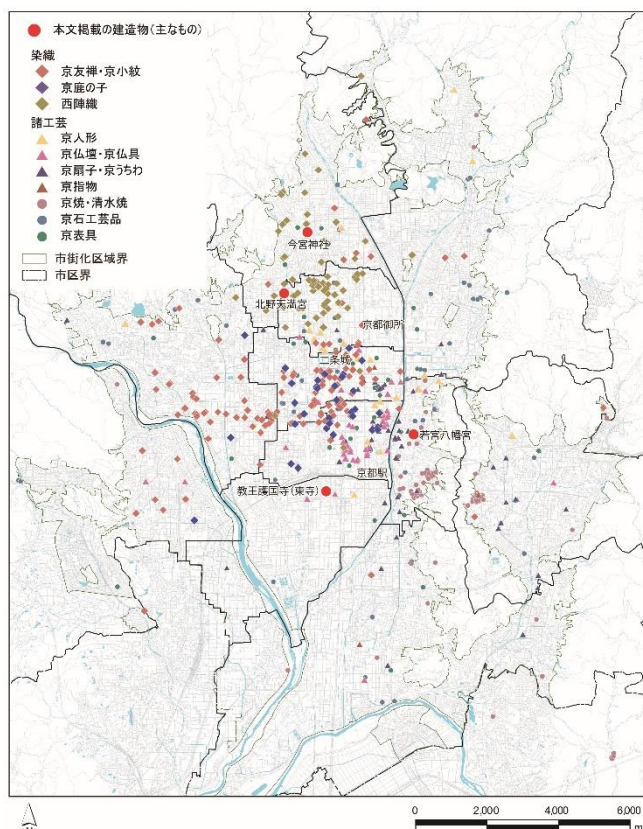


図2-3-1 京都の伝統産業の分布

(参考：京友禅協同組合連合会HP、京鹿の子絞振興協同組合HP、西陣織工業組合HP、京人形商工業協同組合HP、京都府仏具協同組合HP、京都扇子団扇商工協同組合HP、京都木工芸協同組合HP、京都陶磁器協同組合連合会HP、京都府石材業協同組合HP、京表具協同組合HP)

(ア) 京焼・清水焼のまちに続く生業

京焼・清水焼は数多くの技術・技法を特徴とし、茶碗や皿・湯呑みなどの食器類・茶道具・置物などが作られ人々の日常生活に根付いている。ここでは京焼・清水焼にみる歴史的風致について示す。

(a) 建造物

○小川文斎家住宅登り窯、主屋<登録有形文化財>

東山区の小川文斎家住宅登り窯（登録有形文化財）は、明治前期に築造されたもので、東上りの地形を活かして築いた6室の連房式登り窯である。幅5m、全長11mの規模で、東北隅に煉瓦煙突を立てる。

主屋（登録有形文化財）は、江戸末期に建築されたと伝わり、大正8年（1919）ごろに表屋を増築したもので、製陶業で発展した五条坂の風情を今に伝える。

小川家は、京焼・清水焼を代表する窯元の一つで、初代小川文斎が明治6年（1873）にこの地に移り住

んだと伝わる。現在、登り窯は使用されていないが、今もこの地で生産を続ける。



写真2-3-1 小川文斎家住宅主屋

○若宮八幡宮本殿＜市指定有形文化財＞

東山区の若宮八幡宮は、平安時代の天喜元年（1053）に後冷泉天皇^{ちよくがん}の勅願により、源頼義が六条醒ヶ井（現在の西本願寺北東の下京区若宮町）に創建したのが始まりと伝わる。応仁の乱により荒廃し、社地を転々として慶長10年（1605）に当地に移された。

本殿（市指定有形文化財）は承応3年（1654）に建築されたと伝わる三間社流造銅板葺の建物であり、正徳2年（1712）の改修時の棟札が残る。昭和24年（1949）に本殿右側の相殿に陶祖神^{しいねつひこ}の椎根津彦命が合祀されたことから「陶器神社」としても知られる。



写真2-3-2 若宮八幡宮

○雲楽窯^{うんらくがま}

山科区の雲楽窯は、初代斎藤雲楽が五条坂で窯業を営んだのがはじまりで、昭和43年（1968）、三代目のときに、京焼・清水焼団地に移転した。当該団地に開窯した工房は、登記簿等によると昭和42年（1967）の建築である。

いちはやく電気窯を取り入れ焼成に成功、独自の

釉薬を開発するなど京焼・清水焼の新境地を作り出している。



写真2-3-3 雲楽窯 工房

(b) 活動及び市街地の環境

京焼・清水焼は慶長年間（1596～1615）の開窯^{かいよう}とされ、江戸時代中期には五条坂もまた、清水焼の生産地となっていたと伝わる。尾形乾山（1663～1743）が記した『陶工必用』（元文2年（1737））には、「遊行土 洛東松原通（現東山五条）ノ野辺ニアリ」との記述があり、京焼・清水焼が洛東の陶土を主原料としたことはほぼ確実であり、よい土がとれたという地質的条件もここで製陶業が栄えた条件であった。また、『都名所図会』（安永9年（1780）発行）に五条坂付近とみられる焼物商の様子が描かれる。

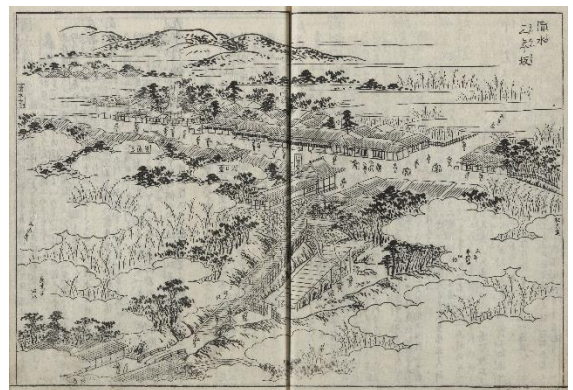


図2-3-2 清水三年坂（のぼり窯の道）

（出典：『拾遺都名所図会』（天明7年（1787））

幕末から明治初期の段階で五条坂には38軒のやきものの屋が建ち並び、江戸後期の日本の窯業に関する史料である『本朝陶器攷證』^{ほんちようとうきこうしやう}には、10の登り窯があったと記される。明治29年（1896）には、市立陶磁器試験場が五条坂に創立され、近代には、五条坂地区に多数の登り窯が築かれ、五条通沿いを中心に窯元や販売店が並び、やきもののまちとして隆盛した。

現在五条坂というと、東大路から清水坂へ至る部分の名称としてよく使用されるが、かつては、現在の五条通の大和大路から清水坂との交差点辺りを

示した。清水寺から現在の東大路通に下っていく通りが清水坂と呼ばれ、清水坂から分かれ、五条通へと下っていく通りは五条坂と呼ばれ、いずれも清水寺参詣道であった。

五条坂、茶わん坂はともに清水山の西側の麓に位置し、清水寺から東山五条に至るまでは急な傾斜地であり、東山五条から五条通沿い、五条大橋に至る間は緩い傾斜となっている。京焼・清水焼の登り窯は、これらの傾斜を利用して築造された。現在、この地域には、小川文斎窯（小川文斎家住宅内）、藤平窯、河井寛次郎窯（河井寛次郎記念館内）、入江道仙窯の4基が残る。大正初期になると、京焼・清水焼の生産地は日吉や泉涌寺に転進していった。

現在五条坂の夏の風物詩ともなっている「陶器まつり」は、毎年8月7日～10日に開催される。大正9年（1920）に六道珍皇寺に精霊迎えに訪れる参詣客を対象に、日頃上品として売れないものを安売りした陶器市が始まりとされる（関係者回顧録より）。昭和24年（1949）には若宮八幡宮に陶祖神が合祀され、陶器市は若宮八幡宮の例祭となった。

陶器まつりの日には、五条通沿いには数百の出店が並び、所狭しと色鮮やかな器が並べられる。五条通では陶器神輿巡行が行われ、陶器があしらわれた神輿が若宮八幡宮から五条坂を練り歩く。



写真2-3-4 五条坂陶器まつり大器市
(提供：五条坂陶器祭運営協議会)

戦後になると五条通りが拡幅され、登り窯は電気窯・ガス窯への転換が進められ、窯業者の多くは山科区の清水焼団地などに移った。五条坂は陶磁器販売のまちへと変化していったが、五条坂周辺には今なお京焼・清水焼の窯元、陶磁器販売店が集まり、登り窯、陶芸家の旧居などが残る。

清水焼団地は、昭和の高度経済成長期に新天地を求め有志が集まり、昭和30年代（1955～1964）に居住と工房を併せた工業団地として山科の地に誕生した。

清水焼団地では、毎年10月第三金曜日から日曜日の3日間、「清水焼の郷まつり」が開催され、令和元年（2019）で第45回を迎える。清水焼団地一帯に、多種多様な京焼・清水焼の店舗が出店し、清水焼の郷会館を中心に陶器を求める客で賑わう。



写真2-3-5 清水焼の郷まつり

現在、五条坂では登り窯からやきものを焼く煙が漂うような光景を見ることはなくなったが、登り窯が存在したことを偲ばせる坂道において、店の主人が、やきもの店に並んだ器を手に取る清水寺の参詣客と会話を交わす姿がそこここにある、今なおやきもののまちは健在であり、活気にあふれている。

清水寺への参詣客や、五条坂や五条坂に平行した形で清水寺に続く茶わん坂に軒を連ねた店舗は、この町の京焼・清水焼の歴史を偲ばせる。

また、五条坂を東に進んだ東山山麓の東側に位置する清水焼団地でも、雲楽窯のような、昭和40年代（1965～1974）前後に建築された工房には窯元の看板が掛り、陶芸のまちであることが感じられる。

これらの日常の営みや、陶器まつりの際の営みが、往時を思わせる登り窯などの歴史遺産や歴史的な町並みと一体となって、活気ある伝統産業の技術の香りを感じさせている。

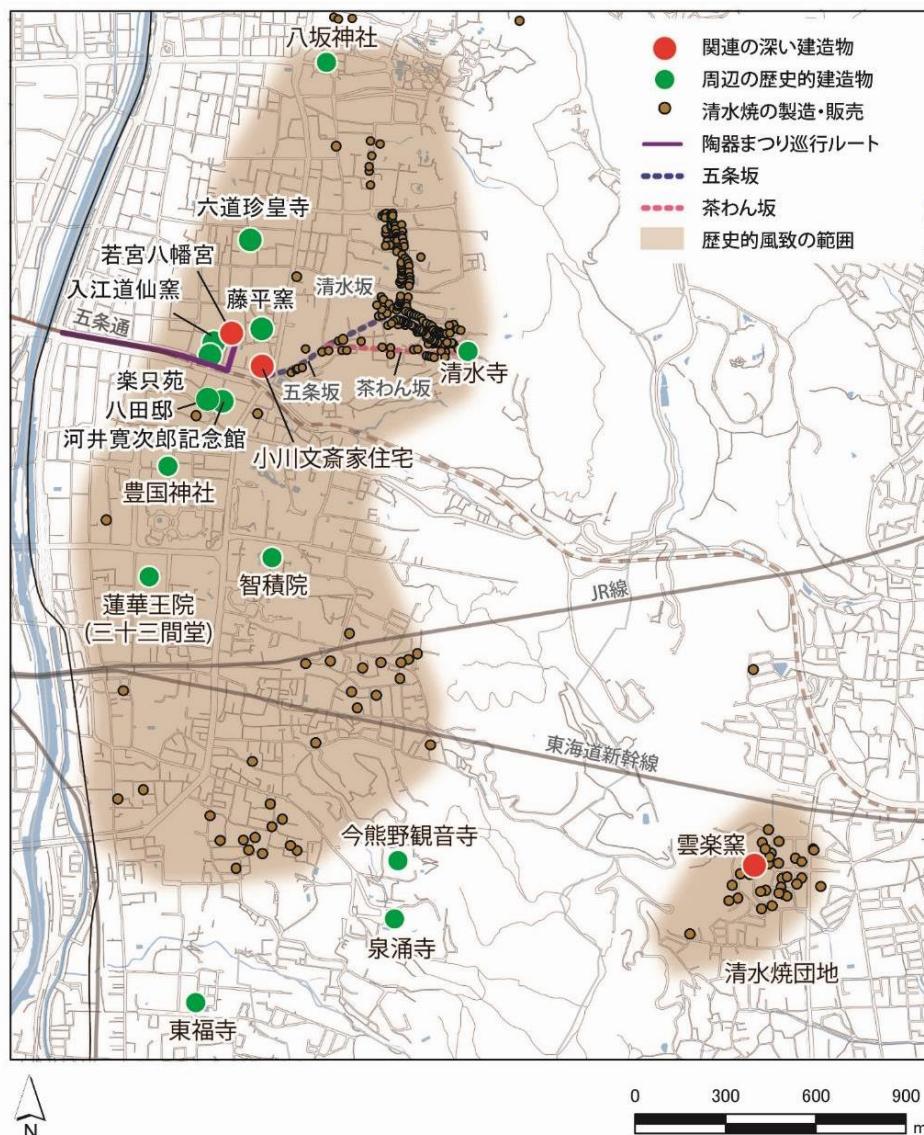


図2-3-3 京焼・清水焼生産地の分布（参考：京都陶磁器協同組合連合会HP）

(1) 西陣織のまちに続く生業

西陣織は、京都を代表する伝統産業である。その生産は多くの工程に分業され、それぞれに高度な専門技術が必要とされる。西陣では、このような専門技術をもった職人が伝統を守りながら、織物の生産を行う。

(a) 建造物

○洛陽織物

上京区の洛陽織物は、明治 31 年（1898）の創業以来 100 年余りの歴史を持ち、現在も西陣の地域で生産を続ける織元の一つである。社屋は慶応 3 年（1867）建築と伝承される京町家で、登記簿等によると明治 5 年（1872）の記録が確認できる。奥の工房では現在も手織を織り続ける。



写真2-3-6 洛陽織物

西陣の町家の多くは工住併用住宅である。洛陽織物もその一つである。西陣の工業地域としての特徴は、その主な生産業である機業きぎょうが高度に分業化されており、その各工程を担当する機業者が集住している点であり、地域が一つの工場を形成しているともいえる。その各工程を結ぶ存在が地場問屋といわれる存在であり、資金を調達して、糸の工面に始ま

り、各工程の労賃を確保し、最後に製品を室町の問屋に納めていた。織物生産の工程のうち、最も空間形態に大きな影響を与えているのが織りの工程であり、西陣では織りの仕事場を持つ町家の建て方を「織屋建」と呼んでいる。

織屋建は、通り庭形式の平面を基本とするが、奥の間を吹抜けにして織り場の空間を確保しており、室町辺りの京町家とは大きく異なる。

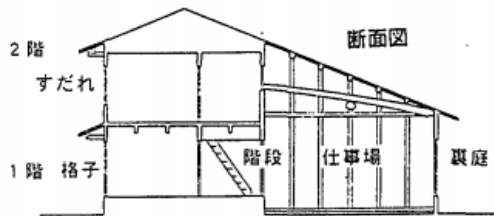


図2-3-4 織屋建断面図（出典：『西陣の小規模織屋建て住宅の住み方と住宅改善』（平成8年））

○佐々木能衣装

上京区の佐々木能衣装は、佐々木重次郎によりおこされ、創業当初から能衣装の織物を手掛ける。デザインや仕立てまで全ての工程を一貫して店内で行い、手織りにより能装束を制作する。大正10年（1921）に子息の佐々木光之助が猪熊今出川において家業を引き継ぎ、昭和9年（1934）に現在の場にて機場兼住居の建設に着手し、昭和11年（1936）に完成し移り住んだ。当時の建築時の見積書に、昭和10年（1935）とある。主屋奥の機場は、トラス梁の洋小屋で、7台の手織り機や糸繰機が並ぶ。

現在の代表取締役である佐々木洋次氏は、選定保存技術「能装束製作」の保持者である。



写真2-3-7 佐々木能衣装

○今宮神社織姫社

北区の今宮神社境内地に建つ織姫社は、正暦5年（994）創建とされ、『今宮神社由緒記』によると、寛政4年（1792）に再建、昭和中期（1956～1965）に現在地に移転した。織姫社の北端に、昭和32年（1957）建立の紋様の祖、岡本尊行氏の石碑が立つ。



写真2-3-8 今宮神社 織姫社

○今宮神社本殿＜登録有形文化財＞（再掲：P2-27
暮らしに息づくハレとケのまち京都の歴史的風致）

(b) 活動及び市街地の環境

西陣とは正式な地名ではなく、西陣織の関係者が集中する地域の総称といってよい。おおむね、東を堀川通、北を北大路通、西を西大路通、南を中立売通に囲まれた範囲を呼ぶのが通例であるが、現在の生産地の範囲はこれより広い。この西陣地区の町割の特徴としては、通りと通りの間を辻子と呼ばれる路地がつなぐ形態がみられる。平安京の条坊制に由来する京都洛中の方形街区は、秀吉の都市改造により南北の通りがつくられることで短冊状に変貌し、一方で既に街区内部の開発が進んでいた鉾町など下京中心部では、この開発がなされなかったことが知られている。これに対して西陣地区は最初から突き抜けを通す都市改造の対象とならず、以降、辻子と呼ばれる細い路地によって方形街区の内部が開発されていった。

また、この地における機業の歴史は、その名の起こりよりはるかに古く、平安時代に律令制の官司の一つであった織部司の職工たちが機業に従事するためにこの地に住んだことに始まる。平安時代の後期に律令制の諸官庁の崩壊以後も職工たちはそれまでの官機に代わって私機の生産を続け、機業地を形成していった。

室町時代、応仁の乱によりこの地も荒廃した。戦火がおさまると地方に離散していた職工が再び戻り、西軍・山名宗全の陣が置かれた堀川の西あたりを中心に集住した。西陣の名の由来はこれによる。

『都名所図会』（安永9年（1780）発行）には西陣織生産の様子が描かれる。



図2-3-5 西陣織の生産の様子

(出典：『都名所図会』(安永9年(1780))

江戸時代後期になると、西陣は享保15年(1730)の「西陣焼け」や、天明8年(1788)の「天明の大火」、加えて、桐生、丹後などのいわゆる「田舎絹」の台頭や質素倭約令によって沈滞し、明治を迎えた。

こうした沈滞を打開したのが明治6年(1873)にフランスから輸入されたジャカード機(力織機)による技術革新であった。ジャカード機は明治中頃から普及するマニファクチュアによって広がり、徐々に中小の織元や自営業者にも広がっていった。そういったなかでも、洛陽織物や佐々木能衣装のように今でも手織りを続ける織元も残る。

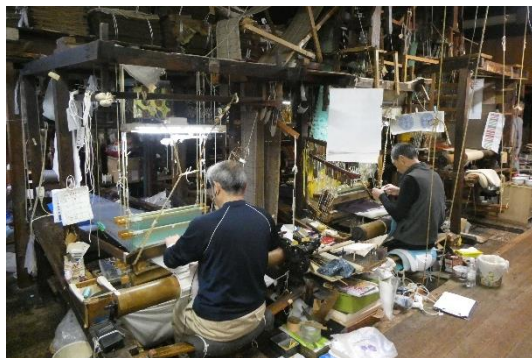


写真2-3-9 手織りの様子(佐々木能衣装)

社伝によれば、今宮神社織姫社では、昭和44年(1969)から、西陣界隈で「西陣」という名称が起る契機となった応仁の乱が終了した日にあたる11月11日を「西陣の日」と定め、「西陣の日」奉祝祭を行う。神前で式典が行われ、織物の祖神に感謝を捧げ西陣の弥栄を祈願する。

西陣地域は、北野天満宮や平野神社をはじめ、高密度な市街地の中の各所に社寺が立ち、織屋建の特徴的な京町家が多く残る。「千両ヶ辻界わい景観整備地区」は、西陣織の一大産地において、かつては千両箱が行き交ったことから称された名称で、現在でも西陣織及び関連業が軒を連ね、地場産業を基盤に商工混合の町並みを形成する。時代とともに、業界もビルや今様の建築に更新されてきたが、この地

で織物業を営む帯屋捨松や西哲機業、京都市内唯一の絹糸精練工場である小林練染工場など伝統的な家屋で生業を営む企業も多く、西陣の歴史的な町並みが維持されている。

○今宮祭

毎年5月5日に行われる今宮祭神幸祭は、^{おいでまつり}御出祭ともいい、平安の昔の「^{むらさきの ごりようえ}紫野御霊会」に始まり、以来、由緒と伝統のある西陣の祭として今日まで営まれ続ける。約800名の行列で西陣のまちを練り歩く。

『百鍊抄』(正元元年(1259))に今宮祭の記載があり、祭礼は室町時代を通じて営まれていたが、応仁の乱や戦国の兵乱後は今宮神社の荒廃とともに今宮祭も衰退する。近世に入り、西陣生まれの桂昌院(徳川家光側室、綱吉生母)が、今宮神社の荒廃を嘆き、元禄7年(1694)から、時の奉行に命じて、社殿を造営・神領を寄進、今宮祭も復興した。

『日本歳事史(京都の部)』(大正11年(1922)発行)にも祭りの様子が詳しく記載されている。

今宮祭は、神輿と剣鉾が出る祭で、神幸祭と還幸祭、その間に行われる湯立祭から構成され、剣鉾は神幸祭と還幸祭の神輿渡御に加わる。現在、今宮祭には9町から各1基ずつ剣鉾が出される。鉾に懸ける吹散は、かつての西陣織の粋を競ったものが多く定評があり、長い鉾を腰帯の前袋に立てて両手で支え、振りながら歩むたび鉾先の剣がたわんで日の光に輝き、鈴がチャリンと音を響かせる。近年は大人の鉾差しが見られなくなったが、子供が小型の剣鉾を差し、鈴の音を響かせる。



写真2-3-10 今宮祭の剣鉾

(出典：剣鉾の祭り調査報告書)

こうした今宮祭は西陣の町衆による町ぐるみの西陣の祭として盛んに行われてきた。

氏子の範囲について、『京都御役所向大概覺書』（享保2年（1717））には「東ハ西堀川限，西ハ七本松通限，南ハ二条御城番北之方御役屋敷迄，北ハ千束村上限」とあり，これは現在の氏子域とされている範囲とほぼ一致する。

西陣の町を歩くと伝統的な町家からしばしば，「ガッチャン，ガッチャン」と機音が聴こえ，色鮮やかな西陣織の図柄が面前に浮かび上がる。これらの営みが，織屋建の京町家を中心とした歴史的な町並みや祭礼と一体となって，伝統産業が今もなお息づいていることを感じさせる。

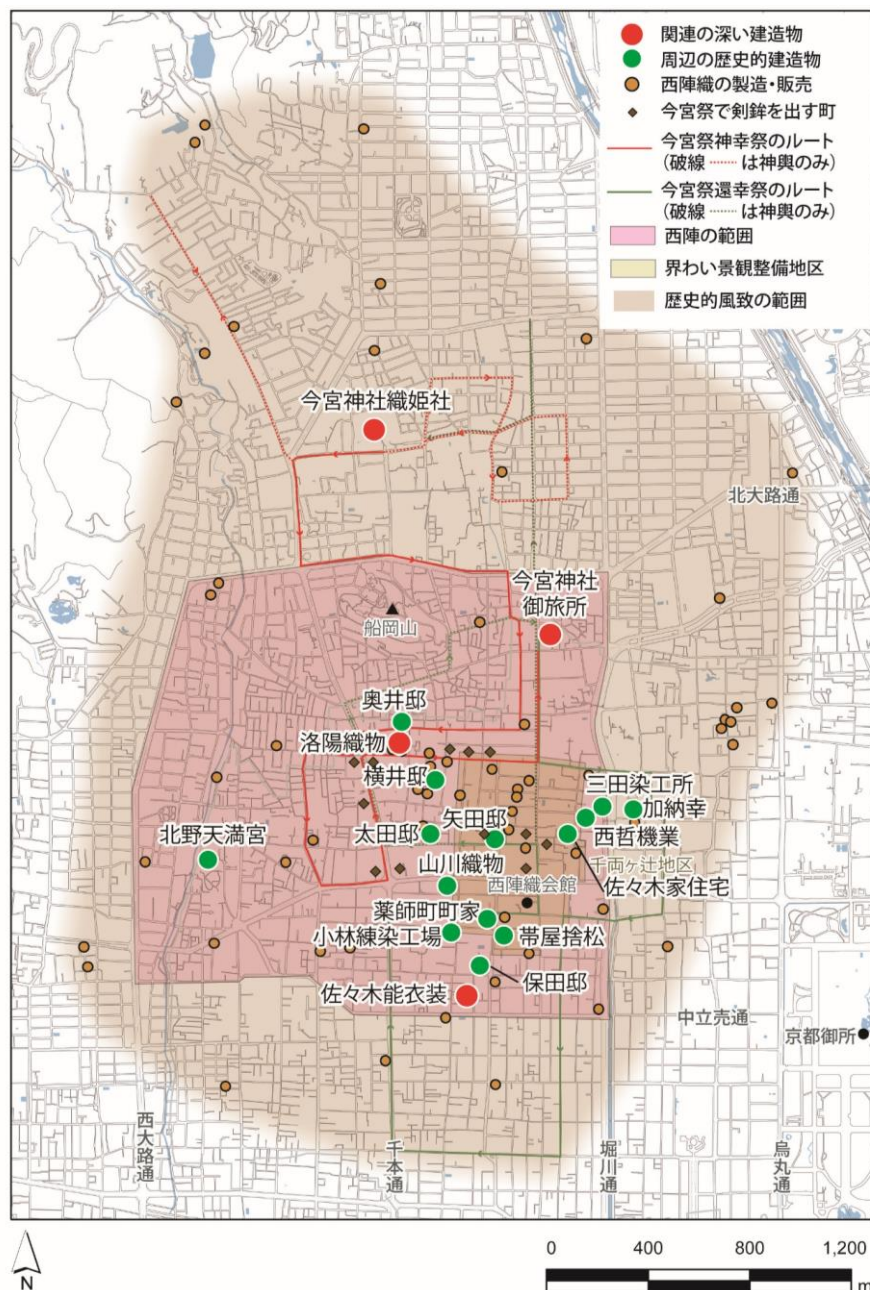


図 2-3-6 西陣織の製造・販売地の分布（参考：西陣織工業組合 HP）

(リ) 京友禅のまちに続く生業

京友禅は西陣織と肩を並べる、京都の中心的な伝統産業である。京友禅の歴史は、町人文化の栄えた元禄時代に開花した。当時、知恩院門前に住んでいた宮崎友禅斎という扇絵師が描く扇絵が大評判となり、着物の染め模様としても注文されたことに始まるとされている。貞享5年(1688)には、『都今様友禅ひいながた』の雛型本(商品などの縮小図を収録した冊子)が発行される。江戸時代の友禅染めは、現在の「手描き友禅」とほぼ同じ技法で制作されていたため、生産量に限界があり、限られた地域・人々への供給にとどまっていた。明治時代に入り、文明開化とともに化学染料が染色に導入されるようになると、化学染料による色糊を使用し、型紙によって友禅模様を写し取る写し友禅染めが発明され、「型友禅」として発展を遂げた。これにより、大量生産が可能になったため、京友禅は一気に普及した。さらにその後、明治期の型染めの広幅への応用やローラ^{なっせん}擦染の導入、戦後の欧米からのオートスクリーン・走行式擦染等の相次ぐ導入が行われるなど、京染技術は多面的な発展を遂げている。

(a) 建造物

○丸染工

下京区の丸染工は、明治36年(1903)に創業した型友禅と呼ばれる技法を専門とする工房で、振袖や留袖を制作する。

社屋は、登記簿等によれば明治期の建築で、木造2階建て。現在型染めは右京区梅津の工場で行っている。



写真2-3-11 丸染工

(b) 活動及び市街地の環境

京友禅は、かつては「水洗い」の工程が鴨川、桂川、堀川、白川、紙屋川などの川で行われ、「友禅流し」と呼ばれていたが、昭和46年(1971)の水質汚濁防止法の施行以来、「友禅流し」は見られなくなった。

京友禅は、西陣織ほどには産地としての集積は見

られないが、室町問屋との取引上の立地条件から、堀川通左右の鴨川から桂川、二条から五条辺りまでの都心部に多数の染加工業者が集中する。

京友禅産地の最大の特徴は、加工方法別・生産タイプ別に、多様な染技法別に生産工程が細分化され、各種の専門業者が存在する社会的分業体制にある。たとえば「手描き友禅」では、プロデューサー機能を担当する染匠の下に精錬業・図案業・浸染業・引染業、下絵業・糊置業・挿し彩色業・蒸し水洗業・絞加工業・金彩業・刺繍業・染色補正業などが存在している。これら10数にもわたる各工程においてそれぞれ専門化され、相互に緊密な分業と協働の関係を構築している。この分業体制が、地域のつながりに影響を与えており、反物はそれぞれの職人の家を次々と移動することで仕上がる。

京友禅協同組合連合会は、こうした専門分業の部門ごと、10の協同組合により構成される団体で、展示会や全国各地で開催されるPRイベント等の需要開拓事業や新商品づくり事業、後継者育成事業等を行う。さらに、傘下の組合は、組合で原材料の共同購入や共同宣伝、展示会や講習会の開催などを行い、職人同士の交流や技術の共有、京友禅界の振興発展に取り組む。



写真2-3-12 京友禅の型置きの様子

かつて通りには、反物や着物、刷毛や染料などの材料を運ぶ自転車や自動車がひっきりなしに通っていた。現在でも、この界隈を歩いていると、平安時代中期ごろが起源とされ、江戸時代中期に成立したとされている伝統的な京町家に「染」といった文字のある看板を見つけることができる。そして、車や自転車に反物を積んだり、脇に抱えて通り過ぎる人々を、見かけることができる。

京友禅の産地である堀川周辺は、手描き友禅の工房を中心とした職住共存の京町家を中心とした歴史的な町並みが形成されている。それより西の壬生・朱雀周辺は、大正期以降に徐々に市街化し、壬

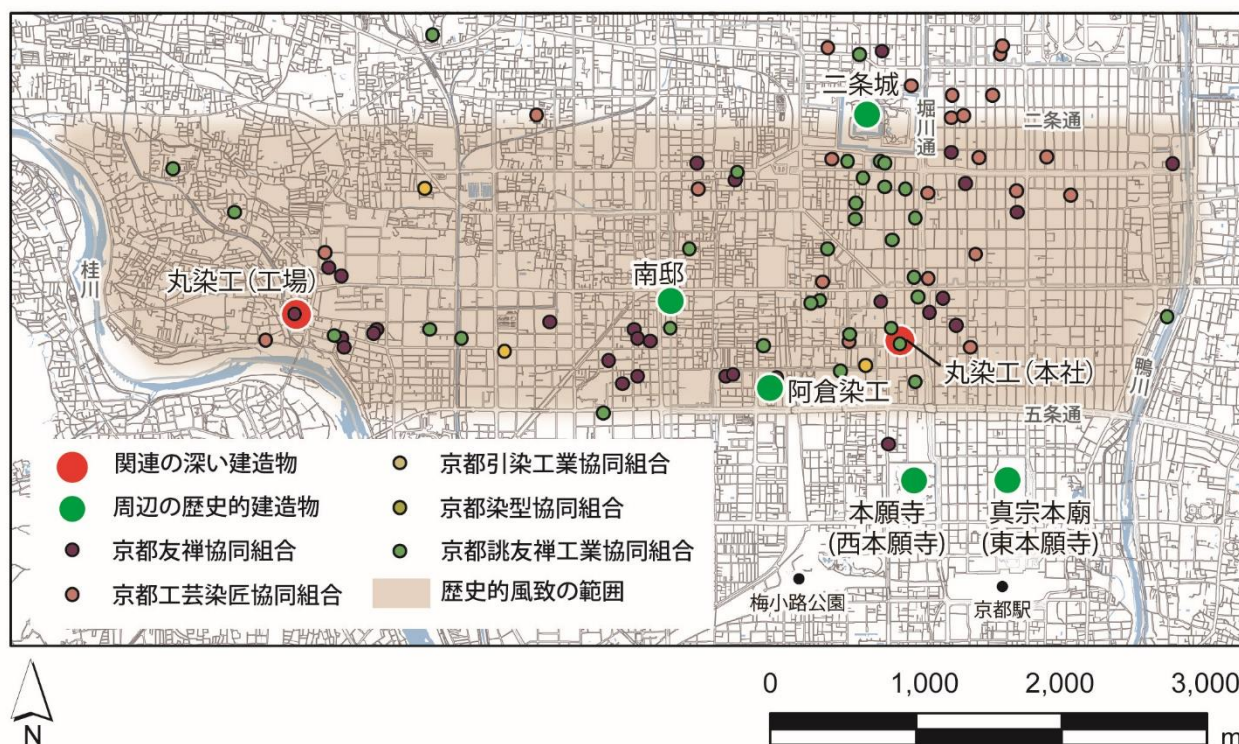


図2-3-7 友禅染の主な生産地の分布（参考：京友禅協同組合連合会HP）

生寺等の史跡や郷土住宅等を残す歴史的な町並みの中に、中小の工場が建築された工業と住宅が共存する地域で、これらの歴史的資産と京町家とが一体となった歴史的な町並みを形成する。さらに西の西院や梅津などの葛野周辺は、工場と住居が共存する地域で、多くの住宅があるなかに、古くからある中小規模の工場や小売り店が残り、都市近郊農業を営む農地が点在する庶民的な町並みを形成する。

表 2-3-1 京友禅協同組合連合会加盟団体

名称	専門工程	設立年
京都誂友禅工業協同組合	誂え	昭和24年(1949)
京都工芸染匠協同組合	デザイン・色作品創作	昭和37年(1962)
京都染織整理工業協同組合	染織物最終加工	昭和27年(1952)
京都染色補正工業協同組合	故障の補正 汚れの除去	昭和27年(1952)
京都染型協同組合	型製作	昭和41年(1966)
京都手描友禅協同組合※	手描き友禅	平成15年(2003)
京都引染工業協同組合	引染め(地色染色)	昭和27年(1952)
京都紋章工芸協同組合	紋章上絵	昭和24年(1949)
京都友禅協同組合	型染め	昭和24年(1949)
京都友禅蒸水洗工業協同組合	蒸し加工	昭和23年(1948)

※京都染技同趣苑協同組合（昭和28年創立）、京都金彩工芸協同組合（昭和49年創立）、京都手描友禅工芸協同組合（昭和50年創立）、京都親彩工芸協同組合（昭和44年創立）、京都手描模様糊工芸協同組合（昭和49年創立）による再編

このように、丸染工をはじめとする京町家などで行われている京友禅の生産や販売の営みが、歴史的な町並みと一体となって伝統の技が今もなお息づいていることを感じさせ、伝統産業の中心地であること感じさせる。

(I) まとめ

京都では京町家をはじめとする歴史的建造物の中で、今もなお伝統産業の営みが続けられており、これらがその町並みと一体となって京都特有の産業の歴史の奥深さを感じさせる。

そして、それらが生産工程において互いに関係し合い、また能などの伝統芸能や茶会などでは、それらの伝統工芸品が道具類や装備品として一つの場集まることで影響しあい、市内各所でそれぞれの産業が関連し合いながら京都特有の産業を生み出している。これが、京都の伝統産業の最大の特徴である。

(3) 商いに見る歴史的風致

ここでは、歴史のなかで形成されてきた問屋や市場、縁日市などに見る歴史的風致を示す。

(7) 問屋街・商店街

問屋街には京都の各地から伝統工芸品をはじめとする様々なものが集まる。ここでは問屋街のなかでも、呉服問屋の歴史的風致を示す。

a. 呉服問屋

京都の織物問屋の発祥は、平安遷都時に国家の直営により設けられた市（東市、西市）にまで遡ると言われる。そのなかでも室町問屋街が発生したのは、延宝元年（1673）三井家が江戸の仕入れ店として三井越後屋京本店を開き、京織物などの仕入れを行ったところからと見られる。この地が近世的な問屋街へと発展したのは、西陣織と京染の需要が飛躍的に拡大した江戸中期、元禄・享保年間と考えられる。この時代に高級絹織物を中心として各産地から集荷し、諸国に販売する全国市場としての基礎が確立された。江戸時代の京都の名所案内である『京羽二重』からも、室町通沿いに呉服関係の店が集まっていた様子が分かる。

(a) 建造物

○ 菅勘商店

中京区の菅勘商店は、創業宝暦年間（1751～1763）と伝わり、金襴絹織物製品の製造卸商を営む。店舗は、登記簿等によると明治9年（1876）ごろ建築されたもので、木造瓦葺2階建ての町家である。

本家は菅田屋庄兵衛といい、享保5年（1720）に創業した。菅田屋庄兵衛は三井越後屋と並ぶ商家であり、菅勘商店は、初代菅田屋勘兵衛が本家より暖簾わけを許され独立した。「菅田屋」は、近世中期の京都・冷泉町の菅田屋庄兵衛家を本家とする一統が用いていた屋号である。同時期、近世中後期に菅田屋仁兵衛家（現：矢代仁）も冷泉町に店舗を構えており、冷泉町を本拠地として展開した菅田屋庄兵衛家とそれを本家とする菅田屋一統が形成され、近世後期には京都を代表する上層商人と有力な一統に成長した。



写真2-3-13 宵山時の菅勘商店（提供：菅勘商店）

○ 菅田屋源兵衛

中京区の菅田屋源兵衛は、元文年間（1736～1740）初代矢代庄五郎により、南矢代菅田屋を創業し、明治元年（1868）に山口源兵衛が7代目を継承、初代菅田屋源兵衛を名乗った。店舗は、登記簿等によると大正8年（1919）に建築されたもので、木造瓦葺の2階建ての町家である。

祇園祭で山鉾を出す黒主山の町内にあり、宵祭では創業270年を記念して平成20年（2008）に制作された270匹の上り鯉を描いた反物を飾る。毎年1匹ずつ金の鯉が書き足され、宵祭に訪れる人々を楽しませる。



写真2-3-14 菅田屋源兵衛と上り鯉の飾り

(b) 活動及び市街地の環境

室町問屋は現在でも呉服問屋として知られ、京染産地の卸機能を担うとともに、西陣、丹後も含めた府内繊維卸の総括機能も持ち、また何よりも和装品の全国最大の集散地として、全国和装品流通の総括機能を持つ。また、室町問屋と言うものの、室町通だけでなく、その周辺に渡って分布する。現在でも、菅勘商店や菅田屋源兵衛のように伝統的な京町家において問屋業が営まれているところもある。その町並みは、普段は京町家をはじめとする静かな町並みであるが、祇園祭の宵山の時期には、その情景は一転する。暮らしに息づくハレとケのまち京都の歴史的風致でも示したように、室町問屋は祇園祭の

山鉾町に立地しているものもあり、祇園祭の懸装品の充実には、その歴史を見ることができる。また、室町問屋の中には、祇園祭時に屏風祭を行う商家もあり、さらに、浴衣をはじめとする和装品を安価で販売する店もあちこちに見られる。山鉾の懸装品や屏風祭、そして色とりどりの浴衣や帯・小物が並べられている室町通周辺は、繊維関係の問屋街が残り、商業・業務施設と住居が共存する職住共存的京町家が連担する歴史的な町並みを形成しており、室町問屋の繊維問屋街としての歴史を感じさせる。

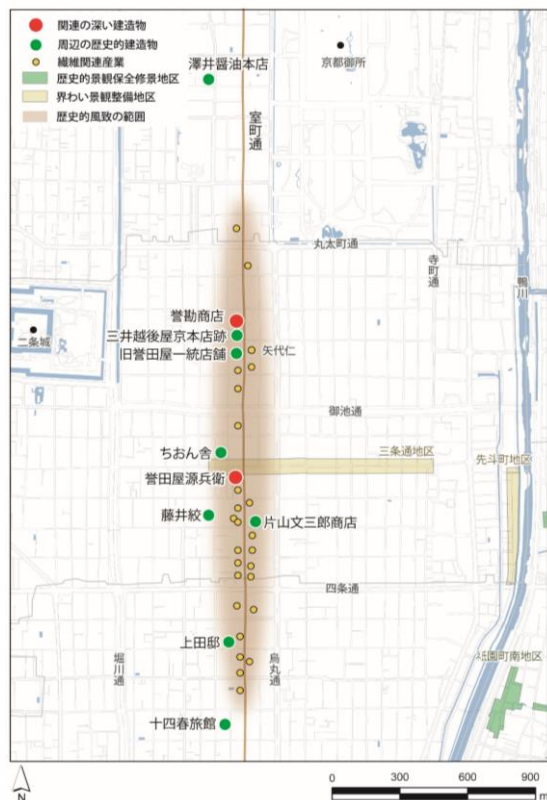


図2-3-8 室町通の繊維関連産業の分布
(参考：住宅地図より抽出)

(イ) 市場

京都には、古くから栄えてきた市場があり、現在においても人々の暮らしに溶け込んでいる。ここでは、市場の代表例として京都の台所として親しまれる錦市場について示す。

a. 錦市場

中京区の錦市場は、魚鳥市場として開設された年月は明らかではないが、この地が人口の密集した中枢部にあたることと、清冷な地下水が湧き出るので魚鳥の貯蔵等に便利であり、御所への魚鳥の納入の経路であったため、自然にこの地に市場が発生したと伝わる。

本格的な魚市場となったのは、江戸時代初頭の元和年間（1615～1623）、幕府より魚問屋の称号が許されたことが契機となった。江戸時代の京都の名所記『京雀』にも錦市場の様子が掲載される。17世紀半ばには、上の店、錦の店、六条の店（問屋町）の三箇所が最も繁栄を極め、これを三店魚問屋と称した。特に錦に店をもつ商人は、公儀から鑑札を得ることにより独占的な営業をしたという。明和7年（1770）に錦小路高倉に青物市場が奉行所より認められ、その後魚問屋付近に野菜の市場が開かれた。

(a) 建築物

〇畑野軒老舗

中京区の錦市場にある畑野軒老舗は、創業大正元年（1912）と伝わり、建築年は定かではないが、明治期の建物登記がある。木造瓦葺2階建ての京町家で京生菓子の製造・販売を行う。



写真2-3-15 畑野軒老舗

〇陶工房 器土合燦

中京区の錦市場にある陶工房は、当初は仕出屋として創業し、江戸時代末期の創業と伝わる。店舗は、明治35年（1902）（普請記録）に建築されたもので、木造瓦葺2階建ての京町家で、現在は陶器の製造・販売を行う。



写真2-3-16 陶工房

(b) 活動及び市街地の環境

錦小路通は、平安京が造営された際から存在する通りで、建設当初、道幅は12mあったが、その後、時代を経るにしたがい幅員が狭くなっていった。

現在の錦市場は、通りが約3mと狭く、店も多くが「うなぎの寝床」と称される間口が狭く奥行きが深い形態となっており、畑野軒老舗や陶工房のように京町家を店舗として商いを続けるところも多い。敷地割や建築構成は、近世以前の形態が残存し、町並みのスケール感を残す。また、商品を通りにはみ出して並べ、店により扱う商品の重複を避けたり、陳列に気を使うなど、店と通りの空間を一体としていて、錦市場として大きな一つの空間としてのイメージを与えている。同時に、各店の個性が強く印象づけられる。このように、商業形態は変化しながらも、歴史的な町並みの構成を残すとともに、市場としての機能を継承した小売業が継続されている。

錦市場周辺は、商業・業務施設と住居が共存する職住共存の京町家が連担する町並みを形成している。錦小路通は京都の中心的な幹線道路で人通りの多い道路の一つである四条通の一筋北側に位置し

ており、中高層の商業施設が連なる四条通とは対照的に今も京町家の店舗が多く残り、歴史的な町並みの中で近世からの商いが今も続けられている。



写真2-3-17 錦市場

このように、錦市場のアーケードの中に、店の間をめいっぱい開いた京町家の店舗が連なり、そこには京野菜や魚、漬物といった商品が所狭しと並べられており、他の店に負けじと発する呼び込みの声やざわめきと市場特有のにおいが相まって、行きかう買い物客に古くから続く、活気あふれる京都の台所の風情を感じさせる。

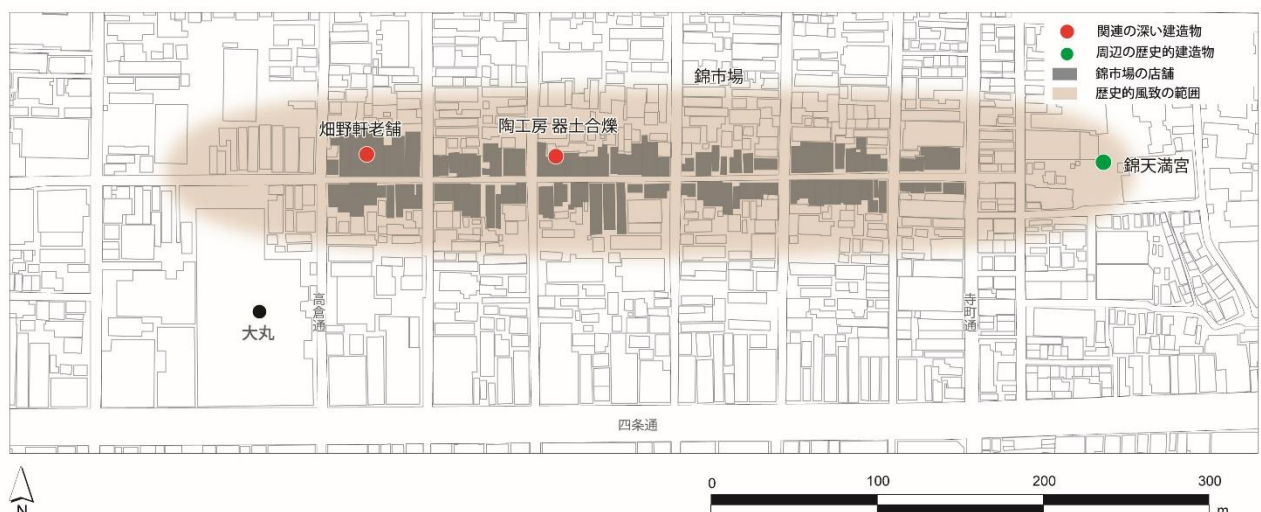


図2-3-9 錦市場

(ウ) 縁日市

縁日というのは「有縁の日」や「結縁の日」の意味で、神仏の降誕・示現・誓願などにちなんで、霊験が顕著とされる日である。寺社ではこぞってこの日を宣伝し、大衆の参詣を促していた。寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった江戸時代の京都では、縁日には、その寺社の境内・参道あるいは周辺付近に、必ず露店の「縁日市」が立った。市内には、弘法さん・天神さんといった、広く市民に親しまれ、多くの参拝者で賑わう、毎月の縁日市がある。

a.弘法さん（弘法市）

「弘法さん」は、弘法大師空海の月命日の 21 日に、教王護国寺（東寺）で行われる弘法市である。

(a) 建造物

○教王護国寺（東寺）金堂、五重塔<国宝>

南区の東寺は、延暦 15 年（796）創建と伝わり、金堂（国宝）は慶長 8 年（1603）再建の入母屋造本瓦葺、五重塔（国宝）は寛永 21 年（1644）に建てられた木造本瓦葺の建物で、東寺真言宗の総本山である。

延暦 13 年（794）の平安遷都に際し、仏教勢力の排除を意図して、平安京には国家鎮護のため羅城門の東西に、東寺、西寺の二つの官寺が造営された。以降、西寺が衰退していったのに対し、東寺は勢力を維持し続けた。嵯峨天皇により、空海（弘法大師）に下賜され密教寺院となった東寺は、鎮護国家・王城守護の寺院にとどまらず、密教の隆盛によって貴族の信仰を集めた。鎌倉時代以降、弘法大師信仰が盛んになり、庶民の信仰によって栄えていく。このため、大宮七条に稲荷社御旅所があったことなども影響し、次第に東寺門前には、門前町が形成された。



写真2-3-18 東寺五重塔

○郷土玩具平田

南区の郷土玩具平田は、登記簿によると昭和 7 年（1932）に建築された木造瓦葺 2 階建ての京町家で、伏見人形など全国の郷土玩具を販売する。



写真2-3-19 郷土玩具平田

(b) 活動及び市街地の環境

弘法市の起源は明らかではないが、中世に「一服一銭」で茶を商う商人が出るようになり、江戸時代には植木屋などその他の商人も出るようになったことが始まりであるとも言われる。寛政 11 年（1799）に発行された『都林泉名勝図会』には、空海の命日に行われる法要、御影供のときの参道の様子が描かれており、植木屋や食べ物の屋台の様子などが見受けられる。



図2-3-10 東寺御影供

（出典：『都林泉名勝図会』（寛政11年（1799））

「弘法さん」の当日の東寺では、御影供が営まれるが、境内や寺の周りには多くの縁起物、日用雑貨品から植木、骨董品まで、広い境内や周辺の通りに所狭しとあらゆる商品の露店が多数軒を並べ、参詣客と活気あるやりとりが繰り広げられる。

なかでも、1 月の初弘法と 12 月の終弘法は特に多数の参詣客で賑わい、威勢のよい商人の呼び声が、雑踏のなかに響き渡る。

東寺周辺は、平安遷都直後に官寺として建立された東寺を中心に開けた市街地であり、鎌倉時代以降、大師信仰の興隆や、大宮七条に稲荷社御旅所があったことなども影響し、大宮通等いくつかの道筋で門前町が形成され、古都の玄関の象徴である五重塔を背景に賑わいを見せる。現在は「東寺界わい景観整備地区」に指定されており、郷土玩具平田も大宮通沿いに位置し、弘法市に訪れた人が店先で京都の郷

土人形である伏見人形などを買い求めていく。

築地堀越しに見える堂舎や五重塔の風景を背景に繰り広げられ、縁日の活気とざわめきのなか、買い物客等は時を越えて歴史ある風情を感じさせる。



写真2-3-20 弘法さんで賑わう東寺金堂前

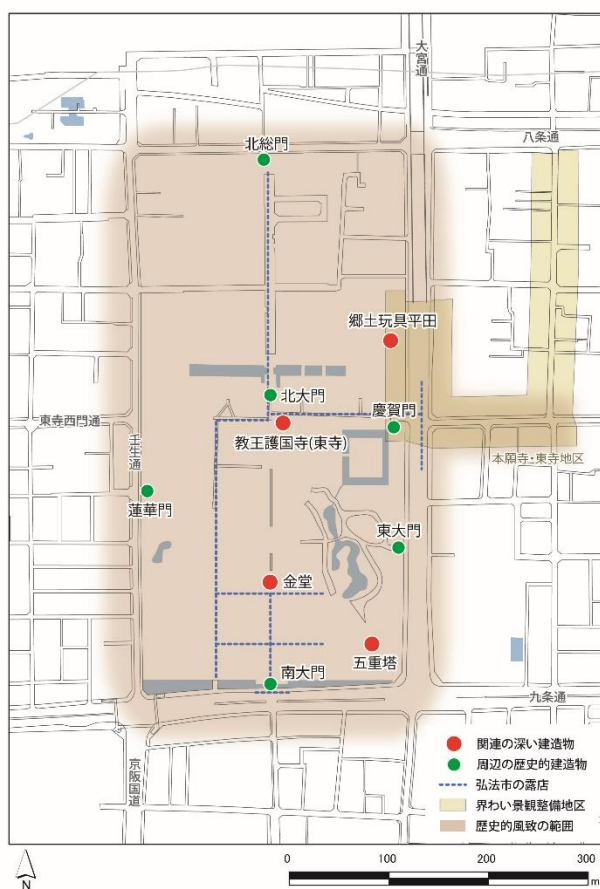


図2-3-11 弘法さん

b.天神さん（天神市）

「弘法さん」と並び、多くの参拝客でにぎわいをみせる「天神さん」は、菅原道真公の月命日である毎月 25 日に北野天満宮（国宝）で行われる市である。

(a) 建造物

○北野天満宮本殿<国宝>

上京区の北野天満宮は、菅原道真公を祭神とする全国約 1 万 2000 社の天満宮、天神社の総本社である。

創建は、平安時代中頃（947）に、菅原道真公を祀ったのが始まりと伝わる。学問の神様として知られ、受験等を控えた参拝者が絶えない。

本殿（国宝）は、慶長 12 年（1607）豊臣秀頼が建築したもので、拝殿（国宝）と本殿を石の間（国宝）で連絡した権現造の原型である。



写真 2-3-21 北野天満宮

○栗餅所・澤屋

上京区の栗餅所・澤屋は、江戸時代の創業と言われ、寛永 15 年（1638）刊行の俳諧に関する書物『毛吹草』や明暦 4 年（1658）刊行の京都で最も古いとされる『京童』にも、その名が記されており、創業以来数百年にわたり営みを続けている。現在でも北野の名物として人々に親しまれている。登記簿によると、昭和 11 年（1936）に建築された木造瓦葺 2 階建てである。



写真2-3-22 栗餅所・澤屋

(b) 活動及び市街地の環境

初天神の北野詣は、近世の記録にもあり、「弘法さん」と同様、寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった近世には、人々の生活の身近な月市として親しまれていたと考えられる。また、『京の年中行事』(昭和33年(1958)発行)にも、1月初天神と12月の終い天神の雑踏の激しさが記載される。

縁日が開かれる当日は弘法さんの縁日と同様、参道や御前通近辺には多くの露店が建ち並び、終日活気にあふれており、今出川通からもその活気が感じられる。天神さんは骨董品と古着の露店が多く集まることで有名であり、なかでも、1月の初天神と12月の終い天神は特に多数の参詣客で賑わいをみせる。

北野天満宮境内にある茶屋では、「天神さん」の日や正月など多くの参拝客が訪れる日に長五郎餅が販売される。また、今出川通に面して位置する栗餅所・澤屋には、北野天満宮への参拝客などが栗餅を求め訪れる。



写真2-3-23 天神さん

北野天満宮周辺は、「上京北野界わい景観整備地区」に指定されており、門前町として形成された歴史の古い市街地で、東門前に位置する上七軒の茶屋町は優雅で落ち着いたある歴史的な町並みを形成する。また、西陣機業の集中する市街地でもあり、その関連業も含む同業者町を形成し、職・住が共存した趣のある街並みを形成する。

立ち並ぶ多くの露店や周辺の商いの活気が、北野天満宮といった歴史的に価値の高い建造物を中心とする周辺の北野界隈の歴史的な町家群等の町並みに溢れ出す。

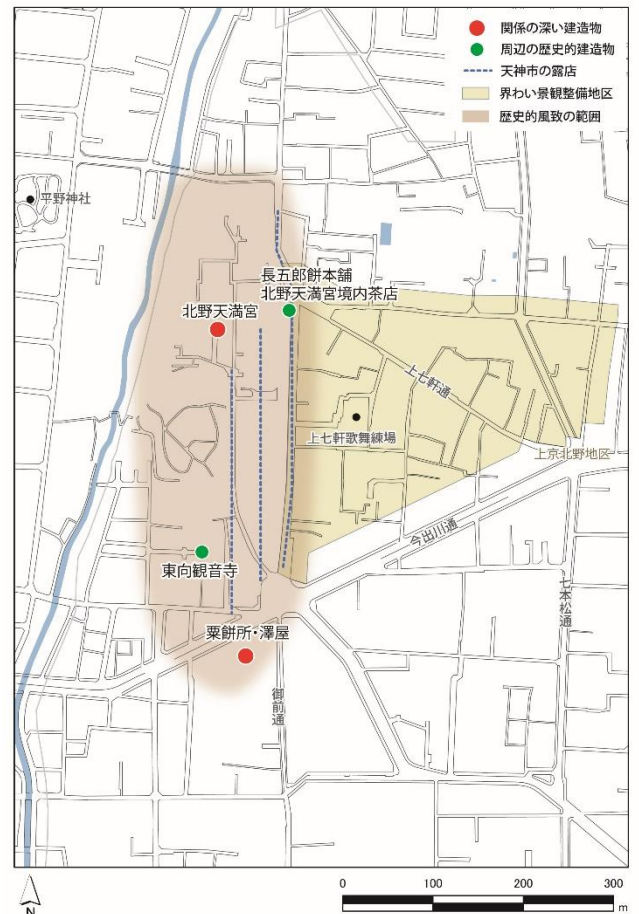


図2-3-12 天神さん

(I) まとめ

このように、京都の長い歴史のなかで形成されてきた問屋や市場、縁日市は、今もなお活気を保ち続けており、客と店員が声を張り上げながら会話する姿や、独特の香りは、今も昔も変わらない歴史と力強さを感じさせる。そして、その活気ある様子が周辺からも見て取れ、人々の心を浮き立たせ、さらに人々を市の中へと誘い込む。また、これらの歴史ある問屋や市場、縁日市では、扱われているものも伝統や歴史を感じさせるものが多く、一層風情を引き立てている。

これらの営みは、中心となる町家や寺社などの歴史的建造物とともに、訪れる人々に問屋や市場、縁日市の歴史を感じさせる。

(4) もてなしに見る歴史的風致

京都の花街^{かがい}の多くは、近世初頭ごろから、北野社や祇園社、清水寺といった地域の神社仏閣へ参詣する人々に茶をもてなす水茶屋が起源となつて発祥したものである。現在は上七軒、祇園甲部、祇園東、宮川町、先斗町の五花街となっているが、平成8年（1996）までは島原にもお茶屋組合や歌舞練場があった。

花街には、芸妓や舞妓が生活する「置屋^{おきや}」と、座敷で客人に舞や音曲を披露し、酒席の空間を提供する「お茶屋」があり、置屋がお茶屋を兼ねているところもある。芸妓や舞妓は、置屋で生活し、芸事等の稽古は、各花街の学校や検番などで行う。

このような学校は、芸妓や舞妓が花街の外で働こうとした際に困らないよう手に職をつけるため、裁縫、機織り等を教える目的で、明治時代初期に設立されたのが前身である。当時は、芸妓や舞妓だけでなく、その花街に暮らす女性一般の教育も広く担っていた。現在、祇園甲部では「八坂女紅場学園^{や しかによこう げ}」、先斗町は「鴨川学園」、宮川町は「東山女子学園」があり、舞踊、邦楽、華道、茶道等を教える。上七軒には、これに相当するものがなく「検番」に拠る。また、祇園東には「美麿女紅場^{み まによこう げ}」があったが大正年間に無くなり、現在はお茶屋組合で稽古を行なうことで、花街の伝統を継承する。

こうした花街で磨かれた芸を披露するのが、各花街の「をどり」や「温習会」と呼ばれる舞踊公演（各花街で呼び方は異なる）であり、その舞台が各花街の歌舞練場である。

表 2-3-2 京の五花街(別表7)

花街名称	歌舞練場建築年※	をどり名	をどり始期
上七軒	昭和6年（1931） 昭和12年（1937）改築	北野をどり	昭和27年 （1952）
祇園甲部	大正2年（1913）	都をどり	明治5年 （1872）
祇園東	昭和33年（1958）	祇園をどり	明治5年 （1872）
宮川町	大正5年（1916） 昭和44年（1969）改築	京おどり	昭和25年 （1950）
先斗町	昭和2年（1927） 昭和8年（1933）改造	鴨川をどり	昭和25年 （1950）

※『京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書＜近代建築編＞』（祇園東除く）

ここでは具体事例として、五花街のなかで最も古い「上七軒」と、現在最も大きな規模を誇る「祇園甲部」の歴史的風致を示す。

(7) 北野をどり（上七軒）

上七軒の花街は、15 世紀中頃北野天満宮（本殿は国宝）が一部焼失し、その際社殿御修築の残材を使い、東門前の松原に七軒のお茶屋を建て参詣諸人の休憩所とし、七軒茶屋と称したのが起源である。その後天正 15 年（1587）に太閤秀吉が大茶会を催し、その際にこの七軒茶屋を、豊公の休憩所に充て、名物の御手洗団子を豊公に献じたところ、いたく賞味に預り、その褒美として七軒茶屋に御手洗団子を商うことの特権と、山城一円の法会茶屋株を公許したのが、我国に於けるお茶屋の始まりであると伝わる。（『京都府下遊郭由緒』）。

上七軒では、毎年春（3 月～4 月）に上七軒歌舞練場で北野をどりが披露され、春の風物詩となっている。

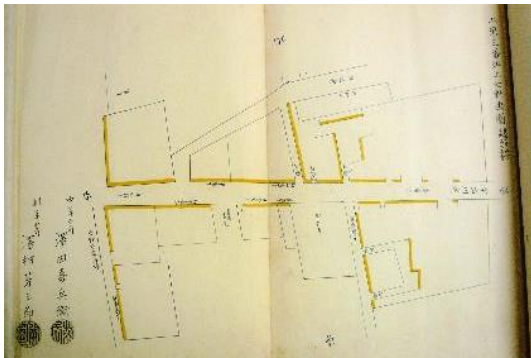


図2-3-13 上七軒（出典：『京都府下遊郭由緒』（明治初期）
京都府立京都学・歴史館 所蔵）

(a) 建造物

○上七軒歌舞練場

上京区の上七軒歌舞練場は、昭和 6 年（1931）に改築された（『京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書〈近代建築編〉』（平成 18 年（2006））。昭和 15 年（1940）に演芸場と観覧席の主体を除く全体の 6 割を焼失し、戦後は進駐軍の接收を受け、ダンスホールとして使用される。その後、昭和 27 年（1952）の「北野をどり」創設をもって、歌舞練場としての本来の姿を取り戻した。

観覧席部分の大屋根は木造で入母屋造棧瓦葺、観覧席には折上格天井を吊り、屋根裏は洋小屋で組まれている。舞台の部分は鉄筋コンクリート造の 2 階建てで、外壁はタイル貼りである。木造とコンクリート造を組み合わせた独自の構成をとる。



写真2-3-24 上七軒歌舞練場

○西方尼寺

上京区の西方尼寺は、寺伝によると文明年間（1469～1487）に真盛を開山として大北山後に尼僧の道場として建立した。永正年間（1504～1521）に現在の地に移り西方尼寺となる。

本堂は昭和 42 年（1967）に再建されたと伝わるが、現在の庫裡は寺院所有の昭和 16 年（1941）実測図で存在が確認できる。

西方尼寺では、古くから尼僧の修業の場としてだけでなく、「利休の井」や利休手植えの五色八重散椿など、千利休や豊臣秀吉にまつわる話が伝えられ、茶道裏千家との縁が深く現在でも上七軒の芸妓・舞妓の茶道の稽古が行われる。



写真2-3-25 西方尼寺

(b) 活動及び市街地の環境

昭和 27 年（1952）に上七軒歌舞練場で始められた北野をどりは、北野天満宮千五十年大万燈会を記念して開催されたもので、踊りの振り付けは花柳流^{はなやなぎりゅう}で、毎年春には多くの客で賑わいを見せている。北野をどりの時期になると、お茶屋の前には北野をどりの提灯が点され、雅な京都らしい独特の風情を醸し出す。『京の年中行事』（昭和 35 年発行）には、上七軒の花街と北野をどりの歴史が記載される。



写真2-3-26 上七軒の町並み

今も趣のある町並みを残す上七軒の花街を中心に、「上京北野界わい景観整備地区」に指定される地域は、北野天満宮の門前町として形成された歴史の古い市街地で、特に、上七軒通には、茶屋が建ち並び、日中お稽古に向かったり、夕暮れ時にお座敷に向かったりする芸妓や舞妓の姿がうかがえる。門前町の賑わいとともに花街の伝統文化が継承されており、優雅で落ち着いた趣のある町並みを形成する。

また、この辺りは、天正 15 年 (1587) 豊臣秀吉が催した北野大茶会の会場で、上七軒歌舞練場の北にある西方尼寺のなかには、茶会のおりに千利休が使ったと伝承される「利休の井」があり、今もこの寺では釜が掛けられ、茶道の愛好家が訪れる。梅の名所で知られる北野天満宮で行われる春の「梅花祭」の際には、上七軒の芸妓・舞妓などの奉仕により、野点の だてが開催されるが、芸妓・舞妓の茶道の稽古は西方尼寺で行われている。春になると、境内の梅と併せた華やかな催しが行われ、北野天満宮の門前町としての歴史的な活動が今に引き継がれる。

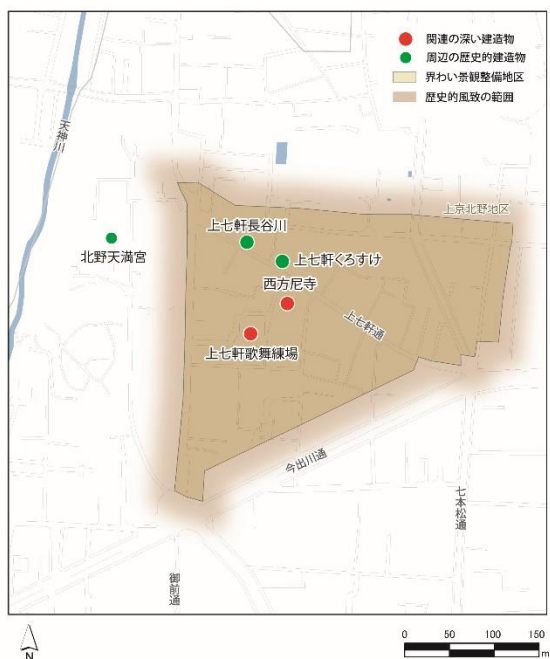


図 2-3-14 京の花街（上七軒）

(イ) 都をどり (祇園甲部)

祇園甲部の花街は、寛文 10 年（1670）に鴨川^{カモガハ}のよう
修工事が進み、大和大路（縄手通）に「祇園外六町」
が開かれ、お茶屋の営業が許された。さらに正徳 2 年
（1712）には「祇園内六町」^{うちろくちょう}が開かれ、祇園の市街地
は拡大の一途をたどっていった。19 世紀初頭には、祇
園町のお茶屋は 700 軒、芸妓・舞妓併せて 3,000 名を
超えたと言われている。祇園町は明治 14 年（1881）に
甲部と乙部に区分され、その甲部が現在祇園甲部と呼
ばれるところである。

明治時代の廃仏毀釈（神仏分離を発端とする明治期の廃仏の運動）政策による上知令により、寺社領が縮小することで京都の町並みは大きく変化し、祇園町にも大きな影響を及ぼした。明治5年（1872）建仁寺の境内の北部が上知され、現在の祇園町南側に編入されたことから、町家が立ち並ぶ花見小路などの町通りが形成された。地域に編入された多くの土地は、女紅場学園の所有となり、お茶屋は土地を借りることになった。現在もお茶屋形式の建物が建ち並ぶ町並みが守られてきた理由の一つである。

祇園甲部では、毎年春（４月）に祇園甲部歌舞練場で都をどりが披露され、春の風物詩となっている。

(a) 建造物

○祇園甲部歌舞練場本館＜登録有形文化財＞

東山区の祇園甲部歌舞練場本館、別館（いずれも登録有形文化財）等は、大正2年（1913）に建築された現存する歌舞練場で最古の建物である。本館は、西面して建つ木造2階建てで、広大な南北棟の入母屋造・瓦葺屋根を架け、西面に千鳥破風を設ける。北側を舞台、南側を客席とした構成で、良質の檜材を用いた丁寧なつくりになる。記念的な木造の大劇場建築であり、祇園町都をどりの盛況を物語る。



写真2-3-27 祇園甲部歌舞練場

○片山邸

東山区の片山邸は、登記簿によると明治 35 年 (1902) 以前に建築された木造瓦葺 2 階建てで、1

重要無形文化財「京舞」（各個認定）保持者井上八千代の稽古場で、井上流による京舞は、明治初年以降、長年にわたり「都をどり」の振付、指導を担う。



(b) 活動及び市街地の環境

『日本歳事史（京都の部）』（大正 11 年（1922）発行）には、祇園の花街の歴史や都をどり創設の経緯が詳細に描かれる。

祇園甲部のうち、「祇園新橋伝統的建造物群保存地区」や「祇園縄手・新門前歴史的景観保全修景地区」に指定されている祇園新橋や、「祇園町南歴史的景観保全修景地区」に指定されている付近は、富美代や一力など今も良好なお茶屋形式の町並みが残る地区であり、千本格子にすだれをたらし茶屋町の町並みを背景に、日中は片山邸へ踊りのお稽古に向かったり、夕暮れ時にお座敷に向かったりする芸妓や舞妓を見かけることができる。また、夜にな

(提供：祇園甲部組合)

鴨川

先斗町地区

川端通

祇園繩手・新門前地区

片山邸

花見小路通

祇園新橋地区

富美代

南座

四条通

祇園甲部歌舞練場

建仁寺

祇園町南側地区

八坂神社

祇園会館

東大路通

0 100 200 300 m

関連の深い建造物

周辺の歴史的建造物

伝統的建造物群保存地区

歴史的景観保全修景地区

界わい景観整備地区

歴史的風致の範囲

2-84

(ウ) まとめ

花街では、ハレの舞台である各花街の踊りや、日常の暮らしが時代を超えて受け継がれ、おもてなしの文化として今もお花街の歴史的町並みに生き生きと息づく。

芸妓や舞妓たちにとって、日頃鍛錬している芸の発表の場である各花街の踊りの日には、具体事例に示したとおり、花街の街なみは提灯やぼんぼりで彩られ、華やかな装いとなる。夕暮れともなれば、提灯やぼんぼりに灯りがともされ、時にはそれが川面に映し出され、昼間とは違った風情を醸し出す。

日常の営みにおいても、普段着姿の芸妓や舞妓がお稽古や髪結いさんに向かう姿や着飾った芸妓や舞妓がお座敷に向かうあでやかな姿などを、花街の町並みのなかで見ることもあり、花街の独特の風情が漂う。



写真2-3-30 花街での暮らし

花街の活動は、花街内部だけにとどまらず、祇園祭の花傘巡行への参加や、時代祭の行列参加など、京都の代表的な年中行事における重要な役割をも担っており、京都の町衆としての営みを見ることができる。

落ち着いた町並みによって引き立てられる芸妓や舞妓や町の人々の姿、時おり耳にするはんなりとした京ことばの会話、これらは全て、人々をもてなす花街の文化を感じさせる。

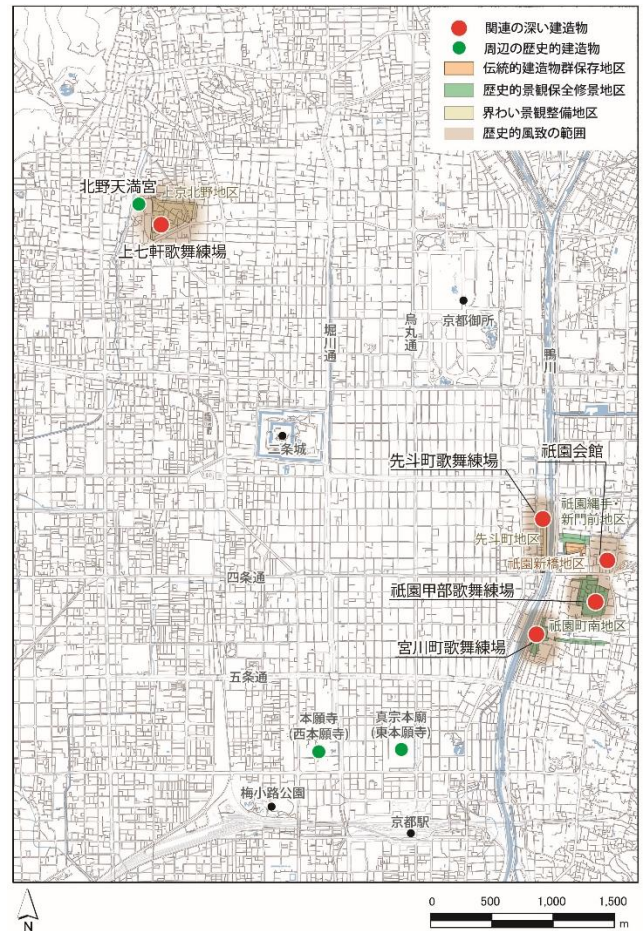


図2-3-16 京都の五花街

(5) おわりに

京都には、京焼・清水焼や西陣織などのものづくり、またそれらを販売する問屋や市場、縁日市での商い、花街でのもてなしの活動が息づく。

このような伝統を受け継ぐ活動は、町家や寺社の境内など、歴史的建造物を中心として行われており、活動の様子は、周囲から伺うことができ、より一層町並みに趣を与えるものとなり、人々を魅了するものづくり・商い・もてなしのまち京都の歴史的風致を形成している。

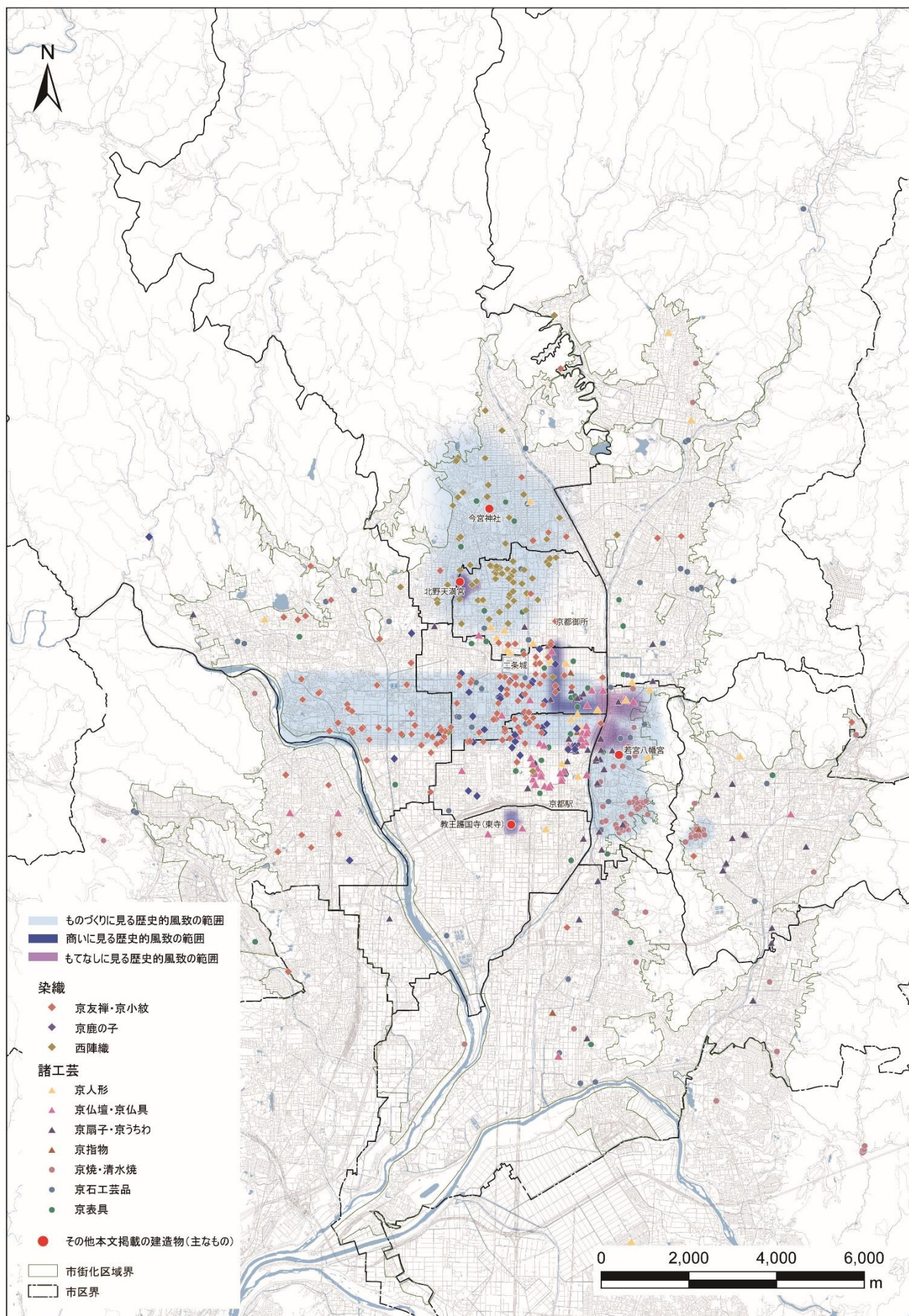


図2-3-17 ものづくり・商い・もてなしのまち京都に見る歴史的風致（総括図）